

創世記 6～9 章のノアの洪水物語は、神様が人間の罪や墮落に怒り、裁きながら神様ご自身が苦しまれるという物語です。旧約聖書の神は怒りと裁きの神で、新約聖書の神は赦しと愛の神であるという人がおられますが違います。旧約聖書の神様も人間の罪や反逆に怒られますが、見捨てることが出来ず苦しめま

す。今朝拝読したマルコによる福音書 1 : 9～13 は、イエス様が公生涯と言われる活動を始められた時のことを記録していますが、イエス様は罪なき神の子でありましたが人間と同じ罪深い者となって洗礼を受けられたということを書いています。その時、「天が裂けて霊が鳩のようにご自分に降って来るのをご覧になった」と 10 節に記されています。「天が裂けて」は、マルコによる福音書 15 : 38 に再び出てきます。イエス様が十字架に架けられて殺された時、神殿の至聖所で聖なる世界と俗なる世界を隔てていた垂れ幕が上から下まで真二つに裂けたと書かれています。イエス様のご生涯が神の世界と人の世界の区別、聖なるものの世界と俗なるものの世界の区別をなくすためであったということを読み表していると思います。

今、日本各地で高齢化と過疎化が進んで、人間の世界と野生動物の住む世界の境界線が無くなりつつあるそうです。シカやサルやイノシシが日常的に人間が住んでいる村や町に入り込んで来て、トラブルが起きているというのです。2040 年までに地方自治体の半分近くが消滅の危機に曝されるという報告もあります。少子高齢化社会は私立学校の存続に関しても大きな試練を突き付けていますが、教会も地方では教派や教団を維持した個々の教会は存立できなくなる可能性が見えます。それを嘆かわしい未来だと考えるのか、約束の未来だと考えるのか、それはそれぞれ受け止める人にかかっています。

「あなたは私の愛する子、私の心に適う者である」とのお声を聴かれたイエス様は、それから荒れ野に行かれたと 12～13 節に書かれています。「荒れ野」にはサタンも野獣も天使もいたと書かれています。ノアの方舟にも清い生き物と汚れた生き物が両方一緒に入っていました。その日々が新しい世界を築く約束の日々であったのです。約束の未来は私たちの身に付いた常識や生活態度、他の人々と自分を区別する境界線が崩れて、違いを認め合いながら共に生きる世界ではないでしょうか。私たちも自分の慣れ親しんだ考えを引き裂き、地域の人々にもっと開かれた教会、子どもや他宗教の人々や他国籍の人々との合同礼拝を目指しましょう。

